

フランス滞在とフランス革命 —— *The Prelude* に従って I

山 田 修 治*

Residence in France and French Revolution —— According to *The Prelude* I

Shuji YAMADA*

I seem'd to move among them as a bird
Moves through the air, or as a fish pursues
Its business, in its proper element;
(*The Prelude*. Bk. VI, 11. 697—9) ¹⁾

まるで空中を飛びまわっている小鳥か、あるいは、
水中を何かの用件をあさっている魚のように、
そうした事態のなかを、ただ動き回っているような気がしてい
た²⁾。

⋮

I lost
All feeling of conviction, and, in fine,
Sick, wearied out with contrarieties,
Yielded up moral questions in despair,
(X, 898—901)

私は、もはや確信の感情をすっかり見失ってしまい、
ついに矛盾撞着に苦悩し、疲れ果て、絶望のうちに、
道徳の問題を放棄してしまったのだ。

I

ワーズワスは自分の経験を「回想」することによって
「自己を完成させることに熱心な詩人」³⁾であったと思わ
れる。そしてそれを大きな目的の一つとして、*Growth
of a Poet's Mind* という副題のもとに書かれた自叙伝
的な *The Prelude* には、その熱心さのあまりか、うた
われている内容と事実の間に、時に相入れない部分や、
重要と思われる問題でありながら記述の差し控えられて
いる部分がある。しかし *The Prelude* はあくまで正確
さを旨とした記録ではなく、一つの文学作品である以上、
そうしたことは必ずしも批難されるべき問題ではない。
そうしたこともあえて念頭ににおいて、ワーズワスの

フランス滞在とフランス革命の問題を、*The Prelude* に
うたわれていることに従って考えてみたい。

ワーズワスが初めてフランス革命を眼のあたりにし
たのは、Cambridge 大学入学後三度目の夏を迎えた、
Alps 旅行の途中であった。ワーズワス20才の時である。
'twas a time when Europe was rejoiced, / France
standing on the top of golden hours, / And hu-
man nature seeming born again' (時まさに、ヨーロ
ッパ全土が歓喜にわきたち、フランスは幸福の絶頂にあ
り、人間は生まれかわるかのように見えた時期だった。)
(VI, 352—4) 詩人自身 'brought its liberty' (解放さ
れて) (VI, 338) と記述しているごとく、1790年6月、
Cambridge 大学での学年試験をすませた後、7月10日
に出発した旅であった。⁴⁾

この時同道した 'A Fellow Student' (VII, 339) は
Wales 出身の、S. John's College で一緒に学んでい
た、「小柄で、快活な」学生 Robert Jones⁵⁾ であった。
ワーズワスが

scarcely had I finally resign'd
My rights among those academic Bowers
When Thou wert thither guided. From the heart
Of London, and from Cloisters there Thou cam'st,
And didst sit down in temperance and peace,
A rigorous Student. What a stormy course
Then follow'd.
(VI, 286—92)

私があの大学の森での種々の権利を、まだ、
最終的にはすっかり放棄してはいなかった頃、
今度は、君が、そこへ入学して来たのだ。
ロンドンのどまんなかのあの僧院から、君はやってきて、
節制と温和さをもって席につき、じつに
おごそかな感じの学生だった。だが、それからが、また
何と波乱にとんだ道程だったことだろう。

*外国語系列 (Department of Liberal Arts and Sciences
—— Foreign Languages)

とうたい、そして

Ah! surely not in singleness of heart
Should I have seen the light of evening fade
Upon the silent Cam, if we had met,
Even at that early time; I needs must hope,
Must feel, must trust, that my maturer age,
And temperature less willing to be mov'd,
My calmer habits and more steady voice
Would with an influence benign have sooth'd
Or chas'd away the airy wretchedness
That batten'd on thy youth. (VI, 317—26)

ああ／ 実際、あれほど孤独なところで、
夕陽のひかりが静かなカム川のうえに消えかかるのを
眺めなくてもよかっただろうに、もしわれわれ二人がほんの
う少し
早く、せめてあの頃、出会ってさえたならば。私はあえて希
望し、
確かにそうだと感じ、きっとそうだと信じないわけにはゆかな
いのだが、
私がわずかに年長なこと、君よりは動揺しにくい気性、
君よりは穏やかな性質、君よりは少し安定した声、そうしたも
ので私が
きつと良い影響を及ぼし、君の青春を
食い荒したあの爽やかな悲慘さを、せめて
和らげるなり、清算してしまうなりできたろうに。

とうたったあの Coleridge⁶⁾ とは、生涯における友の
果す役割の重大さという点で、比すべき基盤が遙かに異
なるとはいえ、ワーズワスにとっては決して楽しいこと
ばかりではなく、むしろ自分の大学生活を振り返って
'far less intense/Than Duty call'd for' (それは、
じつに義務づけられたものよりも、ずっと覇気に乏し)
(VI, 203—4) いものであり、'might have sprung up
of itself/By change of accidents, or even, to
speak/Without unkindness, in another place' (仮
りにある偶然の変化でも起これば、あるいは、決してひ
どい言い方をするつもりはないが、仮りにもっと違った
場所にいたとすれば、さすがの私も奮いたったかも知れ
ないのだ) (VI, 205—7) と述懐するような一面があっ
たことを思うと、性格的には内向的であったワーズワス
が、一緒に Alps 越えという雄大な旅を果そうと決め
た、詩人同様山好きであった Robert Jones は、この
旅でワーズワス自身に大きな意味を持つことになったフ
ランス革命と初めて出会うというその起縁の重さをも計
り、得がたく、貴重な学友であった。

Alps を目指して出発したワーズワスと Robert
Jones はくしくも

it was our lot

To land at Calais on the very eve
Of that great federal Day; and there we saw,
In a mean City, and among a few,
How bright a face is worn when joy of one
Is joy of tens of millions. (VI, 355—60)

ちょうど、あの大祭日の前夜に、カレーに上陸するという
めぐり合わせになった。そして、こんな貧弱な都会の、
たとえわずかな人々の間にも、一人のひとのよろこびが、
同時に何千万の人々の喜びでもあるとき、一体、人間はどんな
に顔を
輝かせるものかをまのあたり見るのができた

のである。1790年7月13日のことであった。民意をエネ
ルギーに、Bastille の要塞攻撃を引金に始まった、自由
・平等・博愛を理想と仰いだあのフランス大革命が、そ
の二年目にさしかかり、翌14日には Bastille 陥落一周年
の記念にわきたたんとする時節のことであった。*The
Prelude* の Bk. VIII の ll. 69—79 で示されているごとく、
人間に対して、生きるものに対して、慈味深い、優しい
心根を持つように、自然を通して育まれていた詩人にと
って、'found benevolence and blessedness/Spread
like a fragrance everywhere' (いたるところに情愛
と幸福とがひろまっているのをじかに見るのが出来
た) (VI, 368—9) こうした光景は、容易に看過し忘れ
去り得るものでは決してなかった。近い将来の大きな問
題の一つの核として、詩人の心の中に深く植え込まれた
はずである。しかし当面の問題としては、まだその頃は
'Nature then was sovereign in my heart' (私の心
のなかでは、大自然が絶対的な大きなちから) (VI, 346)
を持って詩人を支配し、さらに 'delight/Was in all
places spread around my steps/As constant as
the grass upon the fields' (よろこびは、いたるところ
で私の足もとにひろがっていた、まるで、野原をうず
める雑草のように、尽きることなく) (VI, 703—5) と
うたいあげるようなそうした最中にあったワーズワスに
っては、

A Stripling, scarcely of the household then
Of social life, I look'd upon these things
As from a distance, heard, and saw, and felt,
Was touch'd, but with no intimate concern;
I seem'd to move among them as a bird
Moves through the air, or as a fish pursues
Its business, in its proper element; (VI, 693—9)

社会生活という、いわば当時の大きな世帯のなかでは、
ほんの青二才だった私は、このようなものを、
ただ遠くの方から眺めているだけだった。聞いたり、見たり、
感じたり、
心を動かされることはあっても、決してそれは切実な関心には

ならなかった。

まるで空中を飛びまわっている小鳥か、あるいは、
水中を何かの用件をあざっている魚のように、
そうした事態のなかを、ただ動き回っているような気がしてい
た。

そして予定通り Alps 目指して徒歩旅行を急いだのだった。

II

ワーズワスのフランス滞在と、いかにも人間そのものの問題であるフランス革命とをたどっていく前に、ワーズワスの青年期までの人間への認識の過程を、ごく簡単に見ておくことにする。

幼い頃からワーズワスは‘love of Man’（人間への愛）（Ⅷ, 64）, ‘a watchful eye, / Which with the outside of our human life / Not satisfied, must read the inner mind’（人間の営みのうわべでは満足せずに、内面のこころを看破せずにはいられない、あの注意深いまなざし）（Ⅷ, 66—8）を自然を通して培った。^{7）}「森の中にいても」、「山の中にいても」、自然を‘a gracious Guide’（めぐみ深い一人の師）（Ⅷ, 72）として、人間を愛する‘habit’（習性）（Ⅷ, 70）を持つように鍛えられていた。

幼い日のワーズワスの「人間への愛」の対象は‘Shepherds’^{8）}で始まった。この羊飼いを取り囲む田園の「習慣」や「生活様式」は‘were severe and unadorn’d, / The unluxuriant produce of a life / Intent on little but substantial needs’（もっときびしく、まったく飾り立てなどなく、ごく現実的な必要以外には、ほとんど何一つかまけてはいられないような、きりつめた生活からにじみ出て、およそ贅沢などとは縁遠いものだった。）（Ⅷ, 207—9）そうした環境の中で羊飼いがワーズワスを最も深くとらえたのは、‘images of danger and distress, / And suffering’（危険、悲しみ、または苦しみといったイメージ）（Ⅷ, 211—2）としてであり、‘Man suffering among awful Powers, and Forms’（恐るべき力と形象とにかこまれて、苦悩する人間）（Ⅷ, 213）の姿としてであった。こうした羊飼いを通して、ふるさとである Hawkshead や Lake District の‘with their frames / Imperial, and elaborate ornaments’（荘厳な枠組みと、精妙な飾りとをもった）（Ⅷ, 160—1）美しい自然の中で、ワーズワスが見出した人間らしい人間の姿とは、‘Man free, man working, for himself, with choice / Of time, and place, and object’（時間や場所や事物を、自分の自由に選択できる人間、他に依存せず、自分から働いて

いる人間）のことであり

by his wants,

His comforts, native occupations, cares,
Conducted on to individual ends
Or social, and still followed by a train
Unwoo’d, unthought-of even, simplicity,
And beauty, and inevitable grace. (Ⅷ, 153—8)

自分の必要、

自分の慰安、それから、性来の仕事や心遣いによって、
個人的にせよ、社会的にせよ、各々の目的にむかって導かれて
ゆき、

それでいていつも、特別頼みもせず、考えてもみない
随伴者のように、醇朴さと、美しさと、当然そこに生まれてく
るみやびやかさが
傍をはなれないような、

そうした人間のことであった。羊飼いは自分の「仕事場となるその広大な土地の広がり」の中で、自分は‘A Freeman’（一個の自由人）（Ⅷ, 387）だと感じている人間であった。

小学生の頃、働く羊飼いの姿は、折にふれワーズワスの中で象徴化されていった。‘Lord’（王侯）の姿となって感じとられたり、‘Master’（支配者）の姿となって映ることがあった。‘a Power’（一種の神性）、‘Genius’（守り神）と思われてくることもあった。「夕陽の深い輝き」の中で「崇高化され眩しく光る」こともあった。又「遙か彼方の空で」、あの Chartreuse の尖った岩山にただ一つ「孤高として荘厳」に浮かぶ「十字架」だと思い描くこともあった。羊飼いを通し、ワーズワスには‘Man’（人間の姿）が気高く、想像力に富んだ、高貴なもの^{9）}となっていた。

thus my heart at first was introduc’d
To an unconscious love and reverence
Of human Nature; hence the human form
To me was like an index of delight,
Of grace and honour, power and worthiness.

(Ⅷ, 412—6)

そうして私のこころに初めて、人間の本来の性質に対する
無意識の愛と尊敬とが芽生え、そこから
人間のすがたが、私にとって、
よろこびや、美しさや、尊さや、
力強さや、価値などの、一種の指針のようなものとなった。

しかしこうした人間の姿は、ひたすらに象徴化され、高揚化されていただけではない。日常の中で、まだかすかにではあったが、‘learn’d, / Could teach, admonish, suffer’d with the rest / From vice and folly, wretchedness and fear’（物を学び、人にも教え、人をさとすこともでき、また、他の人間とともに、邪悪と

愚劣、悲惨と恐怖とをなめる) (Ⅷ, 424—6) 「存在」としても人間をとらえ始めていたことも事実であった。

我々は何らかの方法で、何れかの方向に一つ一つ認識を伸ばしていくものだ。ワーズワスにとって人間認識の方向がこうにして、‘Men did at the first present themselves/Before my untaught eyes thus purified,/Remov’d, and at a distance that was fit’ (人間というものを、最初から、私の未熟な目のまえに、これほどまでに純化して、しかも、適度に、つかず離れずの距離をおいて、提示してくれた) (Ⅷ, 438—40) ことは幸運であった。ワーズワス自身もこのことに触れ、‘doubly fortunate my lot’ (私の運命は、二重の意味で、幸運であった) (Ⅷ, 447) と感謝を込めてその理由をあげている。その一つは、多くの人達にとってそういう所に移って行けたら特権だと思えるほど裕福な環境に取り囲まれていたこと。そしてもう一つは、自然と共に歩き、人間を雄大で美しい色々な物象を通して見つめ、そうした物象の助けによって人間と心を相通させたということだった。¹⁰⁾ このことは人生の早い時期に、すでに「群集との生活」には必ず付きまとうあの「いやらしさ」や、そこから生ずる「自分勝手」な他人に対する「嘲笑」や「蔑視」を自分の中に潜ませなくてすんだということだった。この幸運によって、ワーズワスには日常生活の中から簡単には拭い去りえない人間の ‘Was founded a sure safeguard and defence/Against the weight of meanness, selfish cares,/Coarse manners, vulgar passions’ (あの卑俗さ、利己的な関心、粗野な振舞い、また下劣な情念など、そうしたものの重荷に対して、確乎とした、いわば安全装置と守備とが、うちかためられた) (Ⅷ, 453—5) のだった。

ワーズワスはごく幼い頃からこうしてゆっくりと、人間の尊厳について、人間生活の中に秘められている善について、真について、愛について、又微かにではあるが悪についても、一つ一つ確実にその認識を伸ばしていった。そしてさらに成長するにつれて、やがて ‘have some promptings’ (ある種の刺激をうけて) (Ⅷ, 515) ‘Enflamed’ (燃えあがり) (Ⅷ, 519), ‘There came…/A wilfulness’ (精神の自在さが生まれ) (Ⅷ, 520—1), そしてこの ‘this new power’ (新たに目覚めた能力) (Ⅷ, 525), つまり ‘poetic Faculty’ (詩的能力) (Ⅷ, 511)・‘imagination’ (想像力) (Ⅷ, 512) によって、人間認識は ‘inwardly contemplated’ (内面的に静観され) (Ⅷ, 632), それにともない ‘thought of human life at times/With an indefinite terror and dismay’ (時折、人生というものを名状しがたい不安と

困惑とをもって考えるように) (Ⅷ, 659—60) なり、さらに人間認識は大きく変容し、その明と暗と、深刻さとを増していくのであるが、そうした過程を、自然との関係と対比させながら、ワーズワスの魂の成長にてらして考えれば

Nature herself was at this unripe time,
But secondary to my own pursuits
And animal activities, and all
Their trivial pleasures;¹¹⁾ and long afterwards
When these had died away, and Nature did
For her own sake become my joy,¹²⁾ even then
And upwards through late youth, until not less
Than three and twenty summers had been told
Was man in my affections and regards
Subordinate to her; her awful forms
And viewless agencies: a passion, she!
A rapture often, and immediate joy,
Ever at hand; he distant, but a grace
Occasional, an accidental thought,
His hour being not yet come.

(Ⅷ, 476—90)

自然そのものが、このような未熟な時期には、その当時の私のいとなみ、動物的な活動、そのほか一切のつまらぬ遊びごとに較べれば、まことに、第二義的なものに過ぎなかったのだし、それから、かなりの時が過ぎ、そうしたものも、すっかり消えうせてしまい、大自然が、やがて、それ自身として、私の歓びとなったが、その時ですら、それからさらに青春時代の後半を通じて、ついに二十有三年の星霜が流れ去ってしまう頃まで、実際、人間は、私の感情の世界や関心の領域では、明らかにあの自然に、あの自然の物凄い形象、目に見えない様々なちからに從属するものであった。じつに自然は、熱情の対象であり、時々には恍惚となり、直接的な、つねに身近にある歓びであった。それに対して、人間は、やや距離をおいたたまさか与えられる程度の好意にすぎず、ふとした拍子に考えるくらいで、まだまだ、正面から人間に取り組む時機は到来しなかった

のである。(尚、11. 482—3 の部分は *The Prelude* の1850年版では、until not less/Than two-and-twenty summers had been told……となっていることを付記しておきます。アンダーラインは筆者によるものです。)

Ⅲ

ワーズワスが二度目にフランスの地を踏んだのは1791年11月27日北フランスの港町 Dieppe であった。¹³⁾ Robert Jones と一緒に楽しんだあの Alps 越えの徒歩旅行から帰って数ヶ月した1791年1月に Cambridge の

B. A. になったワーズワスは

soon I bade
Farewell for ever to the private Bowers
Of gown'd Students, quitted these, no more
To enter them, and pitch'd my vagrant tent,
A casual Dweller and at large, among
The unfenc'd regions of society. (VII, 57—62)

あの徒歩旅行から帰ると間もなく、私は、
例のガウンをまとった学生たちの住む大学の個室に
永久に別れを告げ、もはや二度と再び、そこに足を踏み入れる
ことは
あるまいと、そこを立ち去り、垣根のない世界に、
何ものにも拘束されず、じつに気まぐれな住人として、
漂泊のテントを張ってゆくことになった

のである。‘Yet undetermin'd to what plan of life
/I should adhere, and seeming thence to have
/A little space of intermediate time/Loose and
at full command’ (人生のどんな方向に進んだらよい
のか、まだ、はっきり定めてもないし、したがって、
しばらく、のんびりと、どっちつかずの時間をぜび持ち
たいと思って) (VII, 63—6) ロンドンへ足を向けたのだ
った。¹⁴⁾ 少年時代から強い憧れを持っていた¹⁵⁾ ロンドン
に対して、ワーズワスが当初のうちは大きな感動を受け
たとしても不思議ではなかった。‘By a blank sense
of greatness pass'd away/And afterwards con-
tinu'd to be mov'd/In presence of that vast Me-
tropolis’ (あまりの巨大さに、いたずらに茫然となって
日を過ごし、その後も依然として、あの巨大なメトロポ
リスをまのあたり見ては感動しつづけていた。) (VIII,
744—6) 丘の上で遊ぶ ‘Free as a colt’ (小馬のよう
に自由に) (IX, 18) のびのびと、ワーズワスはその大
都会の中をおよそ5ヶ月間もの間あちらこちらと歩き回
った。¹⁶⁾ その後 Wales に向い、同じ年の10月には再度
ロンドンに戻り、‘Oh, blank confusion!’ (おお、なん
と空疎な混乱だろう!) (VII, 695) という一つの感慨を
持って、‘with small regret’ (ほとんど何の名残り惜
しい気持ちもなく) (IX, 31) ロンドンを去り、フラン
スへ向うことになった。

1791年11月22日頃 ‘chiefly by a personal wish/
To speak the language more familiarly’ (フラン
ス語をもっと流暢に話せるようになりたいという個人的
希望を主として) (IX, 36—7) フランスに渡ることにな
ったのである。その主たる目的はあくまでもフランス語
を流暢に話せるようになりたかったからであり、決して
かってかいま見たフランス革命への興味がその第一義で

あったわけではない。Dorothy の1791年12月7日付の
Miss Jane Pollard への手紙にもそれが明確に示され
ている。¹⁷⁾ ロンドンを出発したワーズワスは、真南に
下ってまず Brighton に向い、4日間そこに滞在した
あと、11月26日の晩その地を出航し、北フランスの港町
Dieppe に27日に到着した。その後陸路をたどり Paris
には11月30日の夜に到着。そこで5日間滞在し、Pan-
théon, Palais Royal, Montmartre, Champs de Mars
をはじめ、その他 Paris に来た人達がぶらつくような
場所はあちらこちらぶらついてみた。‘In both her
clamorous Halls,/The National Synod and the
Jacobins/I saw the revolutionary Power/Toss
like a Ship at anchor, rock'd by storms’ (国民議
会や、ジャコバン党はそれぞれ、騒然とした集会堂に集
結し、まるで嵐にゆきぶられている碇泊中の船のよう
に、これら革命的勢力が大揺れにゆれるのを、私はまの
あたり見た。) (IX, 46—9) しかしその光景に「ある強
烈な責任感」といったようなものは感じたけれども、自
分を感動させたり、大きな喜びを与えたりするような
ものは特別に与えられるようなことはなかった。

フランス語を学ぶという当初の目的を果たすために ‘I
chose for my abode/A City on the Borders of
the Loire’¹⁸⁾ (ロワール河の岸辺のとある都会に、し
ばしの住まいを定めた。) (IX, 38—9) つまり Orleans
にしばしの住まいを定めることになったのである。そこ
での生活は *The Prelude*, Bk. IX の記述に従えば、革
命の騒々しさとはおよそ無関係な平穏な状態で始まっ
た。時折、世相を語る「パンフレットなどに目を通し」、
気持の「高鳴る」こともあったが、強烈な関心と呼び起
こさせるに十分な革命についての「予備知識」を特に持
ちあわせていたわけではなかったので、事柄の一つ一つ
がなにか「支離滅裂なものに思え」、ワーズワスにとっ
てはフランス革命はまさに ‘I was unprepared/With
needful knowledge, had abruptly pass'd/Into a
theatre, of which the stage/Was busy with an
action far advanced’ (何ひとつ必要な予備知識もな
くて、いきなり劇場に飛びこんでみたら、もう舞台では、
だいぶ先のほうを熱演している芝居を観ているようなも
のだった。) (IX, 91—4) 世相に反し、ワーズワスは「夜
ごと夜会」や、「特権階級の人達が集まる形式ばった
席に足しげく通う」のだった。この頃、フランス女性
Annette Vallon と恋仲になり Caroline が出生する
のであるが、なぜか、彼女については *The Prelude* の
中でも全く語られない。(ただ同じ *The Prelude*, Bk.
IX, ll. 555—934に挿入的に語られる悲劇的な物語は、後

にさらに手を加えられて *Vaudracour and Julia* として1820年に独立した作品として発表された。暗示的であり関心を呼ぶ所となっている。)

ワーズワスのフランス革命に対する態度に大きな変化が見られ始めるのは、そうした特権階級の集まる夜会が、いかに生き生きとした生命感に欠けた「退屈なもの」かがわかり、それに代って次第に「もっと騒々しい世界へ」心が向けられていくようになってからである。Orleans にしばらく滞在したあとと移り住んだ Blois の市は、当時連隊の駐屯地でもあったことから、*'A knot of military Officers, / That to a Regiment appertain'd which then / Was station'd in the City, were the chief / Of my associates'* (たまたま、その都市に駐屯していた連隊所属の一団の将校たちが、当時の私の主な話し相手) (Ⅸ, 126—9) となった。彼等は *'(Save only one, hereafter to be nam'd) / Were bent upon undoing what was done'* (<のちに名前を記すはずの、ただひとりの人を除いて>一様にすでに為されたことを、また元に戻したがっていたのだ。)(Ⅸ, 135—6) 革命が始まってまもない今、すでに王政復古を願っていた「生まれのよい」王党派の人達であった。ワーズワスは決して流暢とは言えないフランス語で彼等と語らい、時には彼等が彼等の理想を主張し、押しつけがましく迫ってくるのにも耳を傾けた。しかしワーズワスの性格からしても¹⁹⁾ 自分の判断を曲げ、彼等の理想に同調するということではなかった。むしろそうした *'advocates'* (旧制度の擁護者たち) (Ⅸ, 254) との語らいを通して、*'zeal which yet / Had slumber'd, now in opposition burst / Forth like a Polar Summer'* (かえて反対に、いままで眠っていた情熱が、突如として、まるで極地の夏のように、一斉にほとばしり出て) (Ⅸ, 258—60) 来るのだった。自分の中の「情熱」が突然頭をもたげて、彼等の主張の弱点を果敢に切り崩すことがあったのだ。人間への関心は急速に呼び起され、培われていくことになった。

「こうした将校たちの中に、ただ一人他とは違う共和主義者の将校がいた。」

Among that band of Officers was one
Already hinted at, of other mold,
A Patriot, thence rejected by the rest
And with an oriental loathing spurn'd,
As of a different Cast. A meeker Man
Than this liv'd never, or a more benign
Meek, though enthusiastic to the height
Of highest expectation. (Ⅸ, 293—300)

さきほどの、あの将校たちの群れのなかに一人、

すでにちょっと触れたように、タイプの違った将校がいた。彼は共和主義者であり、したがって、他の連中からは除け者にされ、

東洋で階級の違うものを、ひどくいみ嫌うのと同じようににべもなく爪はじきにされていた。彼ほど優しく親切な人は、いままでの世に存在しなかったほどで、やさしくはあっても、高らかな理想に対してはこのうえなく情熱を燃やしていたひとだった。

「除け者」にされても、「爪はじき」にされても、彼は「一層寛大」であり、自由と平等と博愛の理想の世界を実現しようと、正にフランス革命の最中で、*'wander'd in perfect faith'* (完璧な信念をもって身を処していた) (Ⅸ, 305) ののである。この将校 Beaupuy は極めて身分の高い貴族の出²⁰⁾であったが

unto the poor
Among mankind he was in service bound
As by some tie invisible, oaths profess'd
To a religious Order. Man he lov'd
As Man; and to the mean and the obscure
And all the homely in their homely works
Transferr'd a courtesy (Ⅸ, 309—15)

まるで、
聖職授与式で宣言される誓いさながらの、ある
目に見えない絆によって、とりわけ貧しい人々に対する
奉仕ということが、彼に課せられたのだ。彼は人間を、
人間として愛した。身分の卑しい人々、無名の人々、
つましい仕事につつましくいそいでいるすべての人々に、
彼は特別の好意を示していた。

軍人であった Beaupuy には、ワーズワスによれば、「自惚れ」からというのではなかったが、物事に対するその「熱意」のあまり、時として「ひとりよがり」になると思われるような所があった。しかしそれは決して過度なものではなかった。むしろ「穏やかで落ち着いたもの」であった。その人柄は「高潔」であり、「寛大」であった。ワーズワスはこうした Beaupuy と

did I discourse about the end
Of civil government, and its wisest forms,
Of ancient prejudice, and chartered rights,
Allegiance, faith, and law by time matured,
Custom and habit, novelty and change,
Of self-respect, and virtue in the Few
For patrimonial honour set apart,
And ignorance in the labouring Multitude.
(Ⅸ, 328—35)

市民政治の目的とそのもっとも賢明な形態について、
古代国家における偏見や数々の特権について、
封建時代の臣従の義務が、時代の成熟とともに信義となり、や
がて法律となり、

さらに慣習や慣例にならって、それがまた改革され変化したことについて、
また世襲の榮譽のゆえに特別扱いされる少数の貴族にみられる自尊心や長所について、それに対して
営々と労働にいそむ大衆の無知蒙昧なことなどについて

折にふれては二人だけで語りあう機会を持つことがあった。

ワーズワスには「政治形態」や「法律」の問題、それから「基本的人権」、「公民権」といったような当時の人達がよく一般的に話題にしたような問題について、以前に学ぶような機会を持ったことがなかったし、いろいろな国々がとる「行動」や、それに伴う「利害」といったようなことについても、特別大きな関心や知識を持っていたわけではなかったが、²¹⁾ そうした中で確としてワーズワスが心に秘めていたことは、'my soul/Mourn'd for, or loath'd, beholding that the best/Rul'd not, and feeling that they ought to rule' (この世を最良のものが支配していないのを目撃し、最良のものが世を治むべきであると痛感して、嘆かわしく思い、嫌悪の情さえ抱いた) (IX, 214—6) ということであつた。このワーズワスが 'I gradually withdrew/ Into a noisier world; and thus did soon/Become a Patriot, and my heart was all/Given to the People, and my love was theirs' (まもなく私は、一人の共和主義者となったのだ。そして、私のこころはすべて民衆のうえに注がれ、私の愛は彼らにむけられるようになった) (IX, 122—5) と自覚するに至ったとしても、なんら不自然なことではなかったと思われる。革命について、また政治体制について、心情的に急速に触発されていったのである。

For, born in a poor District, and which yet
Retaineth more of ancient homeliness,
Manners erect, and frank simplicity,
Than any other nook of English Land,
It was my fortune scarcely to have seen
Through the whole tenor of my School-day time
The face of one, who, whether Boy or Man,
Was vested with attention or respect
Through claims of wealth or blood; nor was it
least
Of many debts which afterwards I owed
To Cambridge, and an academic life
That something there was holden up to view
Of a Republic, where all stood thus far
Upon equal ground, that they were brothers all
In honour, as in one community,
Scholars and Gentlemen, where, furthermore,
Distinction lay open to all that came,

And wealth and titles were in less esteem
Than talents and successful industry.
Add unto this, subservience from the first
To God and Nature's single sovereignty,
Familiar presences of awful Power
And fellowship with venerable books
To sanction the proud workings of the soul,
And mountain liberty. It could not be
But that one tutor'd thus, who had been form'd
To thought and moral feeling in the way
This story hath described, should look with awe
Upon the faculties of Man, receive
Gladly the highest promises, and hail
As best the government of equal rights
And individual worth. (IX, 217—48)

というのは、私は貧しい地方に生まれ、しかしその地方には、イギリスのどんな片田舎よりも、さらに、あの古い昔からの人々の心の慎みぶかさ、きりっとした物腰、つつみかくさぬ素直さなどが、十分のこされていたので、田舎での学校生活全体を通じて、子供であろうと、大人であろうと、金持ちであるからとか、血筋が良いからといって、ひとの注目をひき、尊敬をうけるような人間には、ついぞお目にかかったことがなかったのは、たしかに私の幸運でもあった。

次いで、ケンブリッジに行っても、そこにはいかにも共和国らしい特質が、はっきり打ち出されていて、そのことは私があの大学生活に負っている数々の恩恵のうちでも、決して意味の少ないものではなかった。ここでは全部の学生が、すべて平等の地位にあり、そのため特待生も裕福な自費生もまるでひとつの共同体の中にいるように互いに信頼しあう兄弟であった。さうに良いことには、ここに

おいては、入学してくるすべての学生は、頭角をあらわすことは自由にできたし、財産も身分も、ここでは、持って生まれた才能や勤勉に努力してえられた栄冠に較べれば、問題にならなかった。そうしたことに加えて、私はごく幼い頃から、神と、その恐るべきからの日常的なあらわれとしての大自然の独裁的力とに服従してきたのであり、そのうへ、精神自体の誇らかなたらしきを是認する尊敬すべき多くの名著とも親しみ、さらに山間に存在する自由を享受してきたのだ。したがって、このように訓練され、またすでにこの作品で述べてきたような方式で思想と道徳的感情とが形成されてきた者として、人間のもつ様々な能力に対しては襟を正し、人間に対するこのうえない期待を喜んでうけいれ、また、平等の権利と個人の価値とを重んじる政治に対して満腔の賛意を示すということは、まさに当然のことであつたろう。

あの革命が勃発した時点で、ワーズワスが新しい時代の到来に対する若者にふさわしいような心の高まりを経験しなかったとすれば、それは一つには ‘unto me the events/Seemed nothing out of nature’s certain course,/A gift that rather was come late than soon’ (私にはこの事件そのものが、自然の当然の成り行き以外のなにものでもなく、届くことがむしろ遅きに失した感じさえする贈物のようだった) (IX, 251—3) ということであった。ワーズワスが共和性を支持し、自分自身を一人の共和主義者だと自覚するに至る道程は、こうして辿ってくると、ワーズワスの本性として当然の帰結であり、必然的なことがらであったように思われてくる。

ワーズワスと Beaupuy は宮廷の悲惨な有様を二人で思い描くことがあった。無情冷酷なあの遊蕩生活、卑劣な人間達が我物顔に振舞う様、人間としての尊厳が尊重されないこと、素直な感情が自然にほとばしることや、慎しい他人への思いやりや、人の心を純化してくれる真実などといったものからはすっかり閉された、一つの軽薄で残酷な世界。そこには邪悪がはびこり、悪徳が住みついている。さらに重要な問題として、人間と人間の崇高な性質について、澄み切った真実を把握する人間の着実な能力について語り合ったり、守り通されてきた真理や、いろいろな考えを持った宗教的諸宗派が、どのように努力を重ね、それぞれの教義のためにどんなに心苦しんできたのか、又強大な国家がどれほどすばやくいくつも作られてきたかといった事柄を、二人は又語り合うことがあった。そしてこうしたことのすべての生きた証拠を、革命のために立ち上ったフランス国民の中に見たのだった。²²⁾ ワーズワスと Beaupuy は ‘look’d/Upon their virtues, saw in rudest men/Self-sacrifice the firmest, generous love/And continence of mind, and sense of right/Uppermost in the midst of fiercest strife’ (彼らの美点を見、ひどく粗野な民衆のうちにも、このうえなく堅固な意志によって貫かれた犠牲的精神、博愛心、克己の精神、とりわけ、あのもっとも激烈な闘争のさなかにもっとも盛り上がった人間の権利に対する感覚を見てとった) (IX, 391—5) のだった。

ワーズワスはこうした Beaupuy との対話が、かつてアカデメイアの森蔭 (the groves of Academeia) でダイオン (Dion) がプラトンと行った対話²³⁾ にたとえて、その内容のいかに深く、次元のいかに高いものであったかを暗に示している。そして Beaupuy に対する高揚する気持を

If Nature then be standing on the brink
Of some great trial, and we hear the voice
Of One devoted, one whom circumstance
Hath call’d upon to embody his deep sense
In action, give it outwardly a shape,
And that of benediction to the world;
Then doubt is not, and truth is more than truth,
A hope it is and a desire, a creed
Of zeal by an authority divine
Sanction’d of danger, difficulty or death.

(IX, 404—13)

まさに人間性がある重大な試練のせとぎわに立っているようなとき、
周囲の事態が彼を名指して召喚して、
行動における彼の深い読みを具体化して、
外面的にはっきりした形を与えて、この世に
最高の福祉をもたらしてくれるような人、
そうした一人の献身的な人間の声に耳を傾けている
そんな時には、もはや疑惑などはなく、真理は、
真理以上のものとなり、希望となり、願望となり、
神聖な権威にもとづく熱狂的な信条となり、
それは危険も艱難も、死さえも是認するものになるのだ

と表現し称えた。Beaupuy と共にワーズワスは、もはや抵抗されえない「一つの精神」がフランス全土に満ちあふれている今、‘as sum and crown of all,/Should see the People having a strong hand/In making their own Laws, whence better days/To all mankind’ (これらすべての総決算として、国民が自らの法律をつくる強力なちからを獲得し、それによって、より良い日々が人類全体に及ぶのを見とどけられるだろう) (IX, 530—3) と真剣に信じたのだった。しかし革命に殉ずる者に必ずつきまとう定め無さを証するかのように、Beaupuy は「ロワール河の川岸で、自由のために、同胞でありながら考えを異にするために戦わねばならなかったフランス人と、重要な指揮をとって戦っているさ中に、戦死してしまったのだ。」²⁴⁾ ワーズワスは戦に赴く Beaupuy と、1792年7月27日に別れたのが、彼との最後の機会となった。

IV

ワーズワスは1792年11月末かあるいは12月の初めにはイギリスに帰国していたと思われる。²⁵⁾ ‘Reluctantly to England I return’d,/Compell’d by nothing less than absolute want/Of funds for my support’ (生活資金の極度の欠乏という、最大の理由に余儀なくされて、渋々、イギリスに帰った) (X, 190—2) のである。この帰国にさいし、1791年12月6日に辿り着いた Orleans²⁶⁾ を Paris に立ち寄るなん日か前におそらく

徒歩で出発し、1792年9月末か遅くとも10月29日頃には一旦 Paris に立ち寄り、²⁷⁾ イギリスに帰国するまでの時を過ごしたと思われる。

Paris では時の流れが、大きく急速な変化を続けていた。1792年3月23日：フィヤン派 (Feuillants) 内閣のあとをうけてジロンド派 (Girondins) 内閣が成立。4月20日：国王 Louis XVI は議会に対してオーストリアに宣戦を布告することを提案し承認された。6月13日：Girondins 内閣は国王に罷免され、Feuillants 内閣が成立。7月11日：議会は「祖国は危機にあり」との宣言を可決。「それを阻止できなかった」Feuillants 内閣は前日の7月10日に辞職。(再び Girondins が内閣を窺う姿勢を示す。) 7月25日：オーストリア・プロシア連合軍の「フランス攻撃軍の総司令官」であった Brunswick 公爵は革命派を威圧するための宣言文を発表。結果は革命派をさらに奮い立たせることになる。同じ25日には Bretagne から、30日には Marseille からそれぞれ連盟兵が Paris に到着。8月9日：議会は「軍事独裁の計画者 Lafayette の責任を追求することを最終的に拒否。民衆の要求は無視され」、その夜「パリ全市に警鐘がなり」、各区代表が市庁舎に集まり、「手工業者」「新聞記者」「弁護士」「宿屋の主人」などを含む「二百数十人」からなる「蜂起の Commune」を形成し、民衆や連盟兵と共に、翌朝8月10日 Tuileries を攻撃。議会は国王の権利停止を宣言し、国王を投獄。普通選挙による国民公会 (Convention nationale) の召集を決定。事実上、「第二次革命」を成功させる。8月24日：オーストリア軍に「ドイツ国境に近い都市 Longwy が15時間の砲撃ののち陥落」させられる。Longwy のすぐ西にある Verdun の包囲も間近と思われる。8月25日：懸案の封建的諸権利無償廃止の法令が布告される。9月1日：Verdun 陥落。オーストリア軍はその余勢をかって Paris に攻め入るのではと思われた。「Marat, Danton, Robespierre を chief とする Commune の委員会は September Massacres を組織し」「市民よ、武器をとれ」と檄をとばした。「外敵と反革命派の両面から追いつめられていると感じた民衆」は Champs de Mars に集った時、まず「牢獄へおもむいて、人民の敵たちをこらしめないうちに出発すべきでない」という主旨の「Marat の檄文」に促されるように大虐殺へと走った。「3000人以上の反革命容疑者」が牢獄から引き出され、虐殺された。9月2日から4日にかけてのことであった。9月20日：Verdun を陥落させた Brunswick 公爵は、まもなく Paris を陥れるだろうと予想されたが、「フランス軍を軽くみた」のか Valmy で Dumou-

riez と Kellermann の率いるフランス革命軍の善戦にあい、敗退する結果になった。同じ9月20日には「立法議会にかわる新しい憲法制定議会」である国民公会が成立。9月21日：国民公会は王権の廃止を議決した。翌22日にはキリスト紀元を廃止し、以後「共和国第一年」と呼ぶことを決めた。当初国民公会を支配することになった Girondins は9月25日 Marat を独裁であると非難し、10月10日には Danton を収賄容疑で非難、つづいて10月29日 Robespierre の独裁を非難。しかし論戦は Girondins の敗北であった。²⁸⁾

丁度この頃であった。ワーズワスが 'enflam'd with hope' (希望に燃えて) (X, 38) Paris に戻ってきたのは。'Again I rang'd/More eagerly than I had done before/Through the wide City' (この前のときよりも、さらに熱心に、私は再び、あの巨大な都市のなかを彷徨した。)(X, 39-41) ここ一年たらずの間に、フランス革命そのものの中に身を投じて、積極的に行動をとるということはなかったにしても、物の考え方の上では、今や「共和主義者」になっていたワーズワスにとっては、これはしごく当然のことであった。この年の8月9日の夜におびたしい暴徒と化した大軍に襲われた 'the Palace lately storm'd' (さきごろ大砲の轟く音もすさまじかったあの宮殿) (X, 44) つまり Tuileries や、この翌日に王子達や王妃の Marie Antoinette と一緒に Louis XVI が囚われの身となった 'The Prison where the unhappy Monarch lay' (不幸な国王が囚われの身となっていたあの牢獄) (X, 42), そして数週間前には、「死体や瀕死の人たちが山と積み上げられていた」 'The Square of the Carrousel' (カルーゼルの広場) (X, 47) を、時代の重さと激しさをひしひしと感じながら「彷徨」したのだった。その時の戸惑う気持ちをワーズワスは

looking as doth a man

Upon a volume whose contents he knows
Are memorable, but from him lock'd up,
Being written in a tongue he cannot read,
So that he questions the mute leaves with pain
And half upbraids their silence. (X, 49-54)

まるで

本の内容の重要さは、よくわかっていながらも、
読めない文字で書かれているために、
その内容がさっぱり解き明かせず、その
無言の頁に問いかけてみては、苦々しい思いをし、
その沈黙をなかば咎める人のような気持ちを、私は味わった

といかにも詩人らしく表現するのだった。当然来るべきものが来たのだとわきたった明るさは、繰りひろげられ

る現実を前にして不安をつのらせるのだった。その夜、ベッドに身を横たえていても、心は乱れ、自由・平等・博愛の精神とはあまりにもかけ離れた、フランス市民が「新しい時代—理性と博愛、繁栄と進歩の黄金時代—が生まれつつあると予言した」²⁹⁾姿とはあまりにも遠い、あの‘September Massacres’ (九月大虐殺) (X, 64) のことが頭に浮かび、‘the fear gone by/Press’d on me almost like a fear to come’ (過ぎ去った恐怖が、これから襲い来る恐怖のように、ひしひしと私の胸を押しつけ) (X, 62—3) のりだった。

翌朝ワーズワスは‘the Palace Walk of Orleans’ (オルレアン宮) (X, 83—4) (もとの Palais Royal) に足を向けてみると、呼売り商人が‘Denunciation of the crimes/Of Maximilian Robespierre’ (マクシミリアン・ロベスピエールの罪状摘発) (X, 87—88) をわめきたてているのに出会った。Robespierre は‘those/Who in attack or in defence alike/Were strong through their impiety’ (破廉恥なために、かえって、攻めこむにしても、応戦するにしても、なかなか手強い連中) (X, 114—6) であった急進的な革命主導派の拠点である Club des Jacobins (ジャコバン・クラブ) の主要な leader として、その独裁的で後の Terreur (恐怖政治) に通ずる September Massacres など一連の政治問題に対して、Girondists の一人 Louvet によって、‘I, Robespierre, accuse thee!’ (ロベスピエールよ、私がそなたを告発する。/) (X, 100) と議場で猛烈な攻撃を受けたのだった。ワーズワスは当時‘their part whose aim/Seem’d best’ (もっともまともな目標をかかげているらしい陣営の人々) (X, 113—4)、しかしまた決断においていくらか鈍さをもった、Gironde 県出身の議員を指導者と仰いで1791年の秋頃に創設された穏健な、理論家の集まりである Girondists を支持³¹⁾していた。

たとえ母国語の英語で話すことが許されたとしても、こと「雄弁」ということでは、ほとんど才能というものに恵まれてはいなかったし、「騒動とか、術策ということは全く不似合」だったワーズワスは、「独裁的権力」というものは「弱い」ものであり、‘Hath neither gratitude, nor faith, nor love,/Nor the support of good or evil men/To trust in’ (感謝も信頼も愛もなく、また、善良な人々からも、悪党たちからも、安心して支援を求めることが出来ないものだ) (X, 168—71) という一つの真理を頭に浮かべ、フランス人ではない自分ではあるが、もし出来ることならよろこんで‘would I willing have taken up/A service at this time for

cause so great,/However dangerous’ (これほど偉大な正義のためには、たとえ、どんなに危険がともなおうとも、あえて一役買って出よう) (X, 135—7) とまで心を高ぶらせ、正義に反する者に抵抗し正義を救うことを頭の中に思い描く程であった。イギリスに帰るといふ差し追った問題がなかったら、この革命にさらに「迷い込み」、自分もまた‘With some who perish’d’ (あの露と消えた人々とともに) (X, 196) 「同じ大義」をかざし‘A poor mistaken and bewilder’d offering’ (途方に暮れた一人の憐れむべきいけにえとして) (X, 197) ‘haply perished’ (命を失っていた) (X, 196) かも知れないと実感を吐露し、³⁰⁾ 自分が頼みとする Girondists の中に、だれか‘the virtue of one paramount mind’ (一人の絶大な力量の持ち主) (X, 180) さえいてくれたならば、あの正義を踏みにじる「血なまぐさい権力を鎮圧し」、「正義のかなる政治への道」を「切り開いて」くれただろうと思うのだった。 つづく

引用文献および注

- 1) *The Prelude* のテキストは Wordsworth: *The Prelude* (Text of 1805) ed. by E. de Selincourt, Oxford, 1966, を使用しました。尚以下 *The Prelude* からの引用の表記は、この場合ならⅧ, 697—9 のように省略して示すことにする。
- 2) *The Prelude* の訳詩はすべて岡三郎訳:「ワーズワス・序曲」, 国文社, 1968から拝借させていただきました。
- 3) 朱牟田夏雄他編:「18・19世紀英米文学ハンドブック」南雲堂 1966の p.162 上島建吉執筆部分。
- 4) この Robert Jones との旅がいかに楽しいものであったかは X, 449—56 でもふれられている。
- 5) その後二度目のフランス滞在から帰国したあと、1793年9月8日にもワーズワスはこの学友 Robert Jones と一緒に Wales に滞在したことがあった。
- 6) He went to Cambridge in October 1791, Wordsworth having left in the previous January: William Wordsworth, *The Prelude*, ed. by E. de Selincourt, Oxford, 1959, p. 553.
- 7) *The Prelude*, Ⅷ, 62—3.
- 8) *Ibid.*, Ⅷ, 178—82.
- 9) *Ibid.*, Ⅷ, 390—410.
- 10) *Ibid.*, Ⅷ, 447—52.
- 11) cf. *Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey*, ll. 73—4, (The coarser pleasure of my boyish days,/And their glad animal movements...
- 12) cf. *Ibid.*, ll. 72—75, nature then/...To me was all in all.
- 13) Wordsworth が兄 Richard に宛てた1791年12月19日付の手紙にこの間の様子が示されている: *The Letters of William and Dorothy Wordsworth, The Early Years 1787—1805*, ed. by E. de Selincourt, Oxford, 1967, p. 68.

- 14) Wordsworth went to London in February 1791, and from a letter of his sister's, dated May 23, we learn that he was then already in Wales; and though he was probably in London again in October, on November 23 he was at Brighton, *en route* for France. *The Prelude*, ed. by E. de Selincourt, Oxford, 1959, p. 585.
- 15) *The Prelude*, VII, 81—120.
- 16) *Ibid.*, VII, 435—9.
- 17) William is, I hope, by this time arrived at Orleans, where he means to pass the Winter for the Purpose of learning the French Language which will qualify him for the office of travelling Companion to some young Gentleman if he can get recommended; it will at any rate be very useful to him, and as he can live at as little Expense in France as in England (or nearly so), the Scheme is not an intelligible one. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth, The Early Years 1787—1805*, ed. by E. de Selincourt, Oxford, 1967, p. 66.
- 18) William Wordsworth: *The Prelude*, ed. by E. de Selincourt, Oxford, 1959, p. 585 に次のような note がみられる。A City on the Borders of the Loire : i.e. Orleans, which Wordsworth reached on December 6, 1790; at some date in the early months of the next year, 1792, he removed to Blois. As Professor Harper has pointed out, Wordsworth does not distinguish in *The Prelude* between his experiences at Orleans and at Blois.
- 19) *The Prelude*, X, 872—3 : stern / In temperament...
- 20) Michel Armand Beaupuy, born at Mussidan, Périgord, in 1755, and thus fifteen years older than Wordsworth. He was of noble family, and descended on the female side from Montaigne; but his sympathy, and that of his mother and four brothers, was entirely with the revolutionary cause, and he was, moreover, a student, and widely read in the philosophy of the eighteenth century. William Wordsworth: *The Prelude*, ed. by E. de Selincourt, Oxford, 1959, p. 588.
- 21) *The Prelude*, IX, 200—6.
- 22) *Ibid.*, IX, 351—91.
- 23) *Ibid.*, IX, 414—5.
- 24) *Ibid.*, IX, 430—3. しかしこの箇所については, William Wordsworth: *The Prelude*, ed. by E. de Selincourt, Oxford, 1959, p. 589 に次のような指摘がある。In this statement Wordsworth was mistaken. Beaupuy was dangerously wounded in the Vendée, but recovered, and served the republican cause with distinction and unswerving loyalty till 1796, when he fell at the battle of the Elz, on November 19. 又 *The Early Life of William Wordsworth*; Émile Legouis, Russel & Russel, 1965 の p. 214, には On the 27th July 1792, Beaupuy parted from Wordsworth for active service with his regiment on the Rhine. The two friends never met again. The war which speedily broke out between France and England soon prevented them even from hearing of each other. Wordsworth was wrongly informed when he supposed that Beaupuy had perished in Vendée, where, it is true, he was dangerously wounded...on the Rhine under Pichegru and Moreau, down to the battle of the Elz on the 19th November 1796 in which he was killed, throughout he remained worthy of the panegyric written in memory of him by the English poet とある。
- 25) 岡三郎訳:「ワーズワス・序曲」, 国文社, 1968, p. 547.
- 26) William Wordsworth: *The Prelude*, ed. by E. de Selincourt, Oxford, 1959, p. 585.
- 27) 岡三郎訳:「ワーズワス・序曲」, 国文社, 1968, p. 545.
- 28) William Wordsworth: *The Prelude*, ed. by E. de Selincourt, Oxford, 1959, pp. 593—4. 河野健二:「フランス革命小史」, 岩波書店, 1959, pp. 110—28. 日比野丈夫編:「世界史年表」, 河出書房新社, p. 270.
- 29) J. M. トムスン著 樋口謹一訳:岩波新書「ロベスピエールとフランス革命」, 岩波書店, 1955, p. 5.
- 30) If he had remained longer in the French capital, he would, in all probability, have fallen a victim among the Brissotins, with whom he was intimately connected, and who were cut off by their rivals, the Jacobins, at the close of the following May. *Memoirs of William Wordsworth* by Christopher Wordsworth, ed. by Henry Reed, AMS Press, 1966, p. 76.
- 31) 研究社英米文学叢書: Wordsworth, *The Prelude*, Vol. II, with notes by Shunichi Maekawa, 1965, p. 109.